



Title	「文系」「理系」
Author(s)	糸魚川, 直祐
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1995, 97, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「文系」「理系」

大阪大学人間科学部教授 糸魚川直祐

「文系」か「理系」かという区別は、いつ頃から日本人の意識の中に入り込んできたのか。世界の歴史と現況をみれば自明のごとく、わが国にも人を区別するさまざまな範疇があり、われわれはその呪縛から逃れずにいる。

勉強の科目に得意、不得意があることは、皆いやというほど知っている。学校教育のことだけを考えてみても、科目にはそれぞれ複雑な特性があり、各人はその特性に応じて得意であったり、不得意であったりする。科目そのものの特性によるのみならず、だれがその科目をどのように教えるかが、得意、不得意を生む原因のひとつである。〇〇科目の先生が嫌いだから、〇〇科目が不得意になったという経験を持たない人はむしろ少ない。

勉強に限らず、あらゆる人間のいとなみは、あれか、これか、という単純な分類によっては区別できない。人はこのことをよくわかっていながら、区別をあえてし、また、それに縛られて身動きができない。人のこのような「分類癖」は、言語を使用する高度な概念操作と思惟行為といえるが、筆者が観察しているサルの立場からすると、人間の愚かな自縄自縛行為にすぎない。

「文系」、「理系」という人間の愚かな峻別意識から逃れるには、どうしたらよいのか。そのひとつは、道具を使って計算することではないかと筆者は考えている。算盤に始まり、計算尺、手動計算機、電動計算機、電卓、コンピュータに至る筆者自身の稚拙な計算遍歴を回顧すると、道具を使っての計算には、多くの人を誘う不思議な共通の魅力がたしかにある。

この魅力を知る人は、「文系」、「理系」という区別がむなしいことを実感している。計算機センターの活動は、われわれの仕事としての業務に役立っているのみならず、われわれの意識改革にも貢献していると言える。